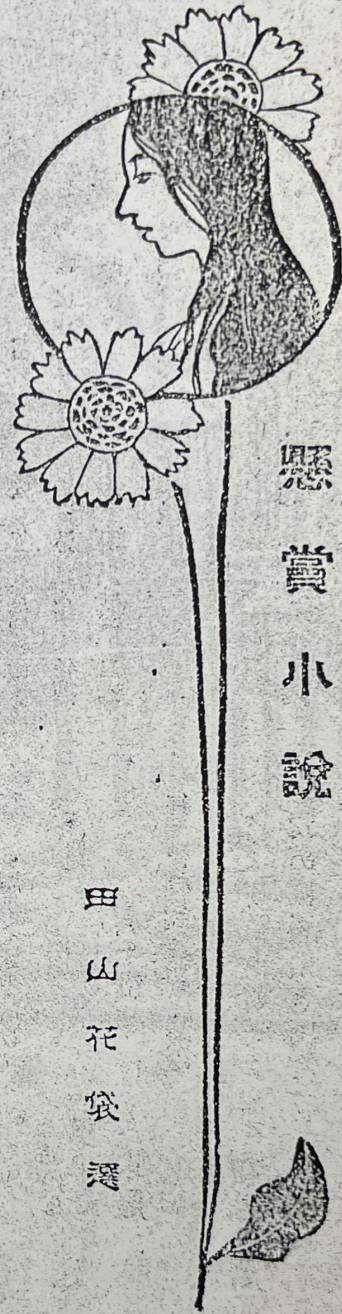


田山花袋選



お寺の子(賞)

水野仙子

「やあ誠に宜いお天氣で……よう續きますのう、あゝ降らないで宜うをした」

方丈様は案内、元氣な聲を出す。

「さ、彼方へ。相變らず何も無いがのう。ほう可愛いのが居ましたの、大かいお饅頭があるぢやハッハ……」腕の衣を揺りあげて、とんと火鉢の火箸を深くさす。

「さあ貴女、どうぞ彼方へ」机の前の羽織着た人も、帳面つけて居た筆を擱き乍ら慫う言つた。

「はい、それでは頂きやしようか。さあ松ちや」お辭儀を一つ軽くして祖母さんは起ち上つた。松ちや

んは祖母さんの袂に擱つて從いて行く。其袂の中には今御佛前を包んで來た風呂敷がはいつてゐるので厚ぼつたい。

次の二間を打つ通した廣い、青い疊の上に、日光塗りの背の高いお膳がズラリと兩側に並んで居る。眞中には、籾の掛つた大きな飯櫃が、退れてゐる蓋の隙間から白い息が立つて居て、傍には黒いお盆が二つ、其一つには、胡麻鹽の器が乗つて居る。

「皆様お早やうござりやす」

と祖母さんは敷居のところ、手をついてお辭儀を爲した。右側に四人、左側の方に二人、皆一度にお椀を置いたり箸を置いたりして會釋をする。

「居らつしやいまし」向ふむきに座つてゐた、綺麗な言葉の綺麗な小母さ

んが、こちらを向いて丁寧にお辭儀をする。

「さ、づつと此方へお詰め下さいまし。其處ではあの、後の方に差支へますから……」

「さあ嬢つちやん、貴女も祖母さんそこへゐらつしや

綺麗な言葉をかけられて、松ちやんは恥かしそうに

ちよこくと祖母さんとこへ駆けていつて、其所でまた隣座の人に挨拶をしてゐる祖母さんの背中に寄りかゝつて、つくくと小母さんの顔を眺めて居る。

「そんでは松ちやん其處にお座り」

お祖母さんは羽織の裾を両手で後に捌いて、一寸抜き衣紋して平たく座る。

「溢さないやうに喰べるのだぞい」

と袖口から手を入れて手拭を出して、松ちやんの膝に

廣げてやる。親腕の蓋をとると、大きな中に二箸ばかり盛つてある。豆の強飯だ。祖母さんは箸を押し頂いて、松ちやんにもそうして遣る。

「さ、頂きなんしよ」

祖母さんはお椀をとりあげた。松ちやんも其通りに

持ちあげると、お椀が大きいので至極持ち悪い。

「お出しなさいまし」

と綺麗な小母さんが前に来てお盆を出した。

「恐れ入りやすね」

と祖母さんはお椀を出す。すると今度は堆高く盛つて来る。

「そんでは松ちやも少し盛けて頂きなんしよ」

と言はれて、おづくとお椀を盆に乗せると、嫣然笑つて、

「まあ可愛いらしうござんすね」

「は、いえなあに、あ、貴女極少々盛つておくん

なはりやしよう」

「は」

「では少しづつ盛いますから……どつさり召し上れ」

外して袷掛げにした藤色の襟が、動いたんびにふ

らゝする。綺麗な小母さんだ。東京の人か知らと松

ちやんは考へてゐる。

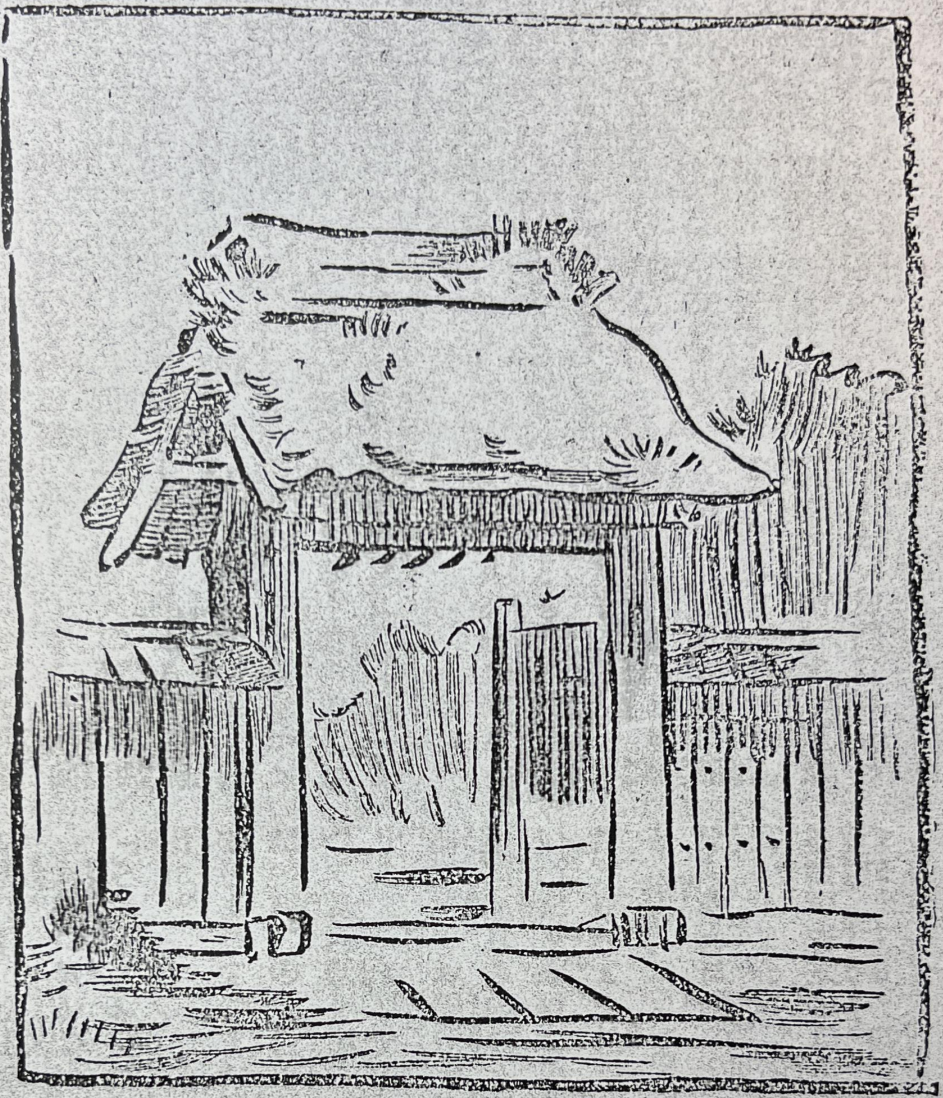
「おみ汁お替へなさいまし。おあついとこを」

「ね、さあ貴女も」

「誰方か一寸来て下さい」

「はい」半纏の上から襟をかけた背の高い伯母さんが来た。

「憚り様ですがおみ汁をどうぞ」



「はいよ。おや貴女お居んなはりやしたね」
 見ると横町の釘屋の伯母さんたつた。
 「はあ、お手傳へ大變ですない」

命搔つ込んでゐるのが、お椀が大きいので顔が一ぱい
 になる。それを松ちやんが凝乎と見てゐると、向ふで
 も氣がついたかお椀を抱いたまゝ箸をかみ乍ら矢つ張

男 藤 野 天 河 駿 門 寺

と祖母さんも挨拶する。
 「どれお汁ですかい」
 釘屋の伯母さんはお盆を持つて
 厨屋の方にゆかれる。
 「貴女、誠に濟みやせんがお湯
 を一つ……」

「は」
 今まで隣座の人と何か高聲に
 話しながら喰べて居た向ふ側の
 端の人が小母さんと呼んだので
 小母さんは湯銅を持つて立つて
 行つた。

「少し強い」
 と祖母さんは呟く。祖母さんは
 柔いご飯が好きなのだ。松ち
 やんと恰度筋向ひに、同じ年位
 の女の子が、祖父さんらしい人
 と來てゐる。肘を張つて一生懸

り此方を見てゐる。

お膳の前には皆ズラリと、三角に折つた紙の上にお饅頭が五つづゝ置かれてある、祖母さんのところにもある、自分の前のは見えないので、お膳の上から少し延び上つて見ると、矢つ張り松ちやんの前にもある。安心して尻を落ちつけると、

「さあしよ、あついとこ」

と祖母さんがお汗を持つて来た。

「松ちや澤山喰べなんしよ」

と言つて其處に座る。

向ふ側では綺麗な小母さんがお給仕に忙しそうだ。

「松ちや是甘いから喰べて見なんしよ」

と伯母さんが云ふので、お平の蓋をとると、切り昆布に、お椀一はいになつてゐるがなんもどき、それを持ち上げて見ると、下にお芋が三つばかりある。皿の縁

はお甘いから、お芋をつついてそれで喰べる。向ふの端の二人はもう終へたのか立つて往つてしまふ。

それと引替へに腰の曲つたお婆さんがはいつて来た。

後からも一人、これもお婆さんだ。二人とも向ひの空席に座る。

「これく松ちや、そんなに外見してんぢやないぞい

さつさと喰へんだ、祖母ちやんはもう終つたんだぞい
ほらもうお念佛が初まつた……それくお飯がこぼれるく

成程本堂に鉦の音がする祖母さんが終つたと聞いて

俄に急いで喰べる。向側の子供も今終つたところでお

爺さんは懐から紙を出して、喰べ残りの芋と油揚げを

包みはじめた。それを手拭にくるんで、またそれを風

呂敷に包む。紙の餘りで鼻をかんでゐる。立つてゆく

ところを見れば矢つ張り腰か曲つてゐた。

漸く終つて箸をおくと、祖母さんは溢れたご飯粒を

拾つて呉れて、お饅頭を風呂敷に包む。勇んでそれを

抱へてつるくす。廊下を先にたつて本堂に行く。人

が多敷輪を造つて南無阿彌陀佛々々々と大きな珠數

を廻してゐる、其真中に白髪のお婆さんが、ちよこな

んと座つて、珠數をかけた片手で拜み乍ら、頻りに鉦

を叩いてゐる。本尊様にお參詣をして、祖母さんもそ

れに交つた。矢張り南無阿彌陀佛くと小聲でいふ。

左手の方には今のお爺さんと子供がゐて、お爺さんに

言はれて小供は外見をし乍らも南無阿彌陀佛を言つて

居る。見てゐると房のついた大きな玉が人の前に行く

度に一々それを拜んで廻す。其玉が正面の、大きな丸

眼鏡をかけたお爺さんの前にゆくと、勿體なさそうに畏つて、算盤の珠見たいなものを一つ動かす。玉は段々廻つて来る。祖母さんのところに來た。祖母さんは頂いた。松ちやんのところへも來た。祖母さんの顔をそつと見ると、「拜んで」と小聲でいふ。けれども恥しいから仕ないで居るうちに玉はすん／＼二三人を拜まれ廻つた。何するのと聞きたいけれども皆が黙つて目をつぶつたり開いたりしてゐるので其儘松ちやんも黙つてしまつた。

本堂の上り段には、本日常山先祖御忌に付午後一時より説教あり、といふ札が張られてある。段の前には門前の子供等子守等、したゝか振舞れた強飯腹をかへて何やらさやつくと騒いでゐる。松ちやんは少し飽きが來たのでつと立つて行つてそれを眺める。同境内の成田山の三階松の木の間から、高麗犬の背中が半分見えて、御手洗鉢の手拭が風にひら／＼する。門前には人が通る、馬が通る。後れ馳せに今はいつて來る人もある。

鉦の音が絶えたので振り返つて見ると、皆今度は正面のところを集まつて來る。必とお説教が初まるのだらう。松ちやんも祖母さんに手を引かれて後の方に座

つた。すると書院から柿色の袈裟をかけた年老つたお坊様が方丈様に導かれて上つて來た。お坊様は一段と高いところの、赤い座蒲團の上に座る。皆平伏した。松ちやんは體の割に小さい其顔を一心に見噴めてゐると、徐ろに舌なめづりして、やがて低い調子で語り出した。けれども松ちやんには何のことだか薩張わからな。たい舉げたり下げたりする手にかゝつてゐる珠數を綺麗なものだと眺めて居る。先刻の子供は直ぐまた前に居てお饅頭を喰べて居る。それを見ると俄に思ひ出して、「お饅頭は」と祖母さんに聞くと、此處にいつて風呂敷を出す。それを弄り乍ら膝を枕にして、龍だの花だの、色々な彫刻を眺めて居たが、それも飽きてしまつて、また祖母さんの袖の下をくいつて廊下に出た。

「それではお前如何しようてえの？」
人聲に氣がついて振り向くと、位牌堂に行く方の暗い廊下に、先刻の小母さんが立つて居る。傍には小ちやい兄ちやん位のお小僧が、短いお衣を着て身をひねつて彼方向きになつて居る。

「そんなお前我儘を云ふと、和尚様に言ひ付ますよ」
お小僧は長い睫毛に一ぱい涙を溜めて、ちらり松ち

やんと顔を見合せると、いきなり小母さんの襦子の帯に顔を押つけた。

「叔母さんはご用があるんですよ……そんな顔してないで少しお遊びよ」

小母さんは其儘すつくと厨屋の方に往てしまふ。

松ちやんは欄干に凭れかゝつて長い袂を弄つてゐる。

ふと手先に觸つたものがあるので取り出して見ると、

昨日大きい兄さんに貰つた白と黒の基石が二つ、踏み

板の継ぎ目を、一年級二年級と片足けんくで蹴つて

居るうち、迂りがよいのですうつとお小僧の前まで迂

つた。お小僧はそれを拾つて莞爾して、

「はい」

と手を出す。

「あんた爲て見」

と松ちやんはいふ。

「如何爲んの？」

すると松ちやんは、手のうちに残つて居た一つの黒

で、蹴つて見せ乍ら、

「此所が一年級、こゝが二年級、こゝが三年、そいか

らこゝが四年級……こゝんとこが高等四年でそいで卒業」

と息を切らして説明する。

「ほうら二年飛んだ！」

「あら！ 駄目々々、今度は私」

暫く二人は夢中で遊んだ。

舊墓地の大杉に鳥が啼いて、門前に豆腐やの呼び聲が

する頃、松ちやんはやうく祖母さんに急ぎたてられ

て下駄をはいた。箒目の目にしたつ庭を、飛石を骨折つ

て飛びく、何か考へてゐるらしく、松ちやんは黙つて

従いて行く。

「何時見ても綺麗な、若い小母さまだ」

と祖母さんは歩きながら獨り言を言ふ。

「え」

松ちやんは問ひ返そうとしたが、今其庭であつたあ

の小母さんのことだらうと敏くも思つて、

「祖母ちやん、あの小母さん何處の小母さん？」

と馳け寄つて袖につかまる。

「あれはお寺の小母さまい」

「そう」

とまた暫く考へて居たが、

「そんではあの、小ちやいお小僧はい？」

「あれかい、矢つ張お寺のお子なのい」

何とはなしに松ちやんは振り返つて見た。
急な大屋根に白い鳩が一羽今止つたところ、銀杏の
病葉がひら／＼と鐘樓の段に散つた。
祖母さんはすでに門を曲つて居る。

あの男(賞)

川浪夕水

「さうですか、彼男はとう／＼發狂したんですか、惜
いことをしましたな、——いや、私も宮井君とは一年
ばかり交際つたことがあるんですがね、其間に斯うい
ふ事がありました。(と言つて月岡君が話した)
私が初めて宮井君を知つたのは、上野の韻松亭で開
かれた某雑誌の文藝會の時でありました。私の隣席に
少し古ぼけた黒木綿の紋付羽織を着た二十三四の男が
坐つて居ましたが、後で思ふ、それが宮井君だつた
のです。見て居ると、他が笑ひ興する時も、彼男は別
に身を動かすでもなく、偶に苦笑位するが、寧ろ倦き
勝で、折々火の散るやうに眸を會衆の上に放つて居ま
した。彼男の顔は妙に綺麗でしたが、併し陰鬱でした
ね。加之に瘦ぎすの方だもんだから、餘計に影が薄い

やうに思はれました。私は其特別に特別の注意もしな
かつたんですが、會が果て、歸り途で不圖連になりま
した。その連となりやうが妙でしてね、後から來た彼
男が私と肩を並べたなり、十間ばかり行つても何とも
言はないのです。

「愉快でしたね。」

「とう／＼私が堪へ切れずに話しかけると、

「貴方は面白かつたですか。」

と餘り訝々しない、何處か九州邊りの訛りで言ふか

ら、私は勢よく、

「然、非常に愉快でした、斯ういふ事は時々行つて可

いですが、面白いですな。」

と答へました。すると、彼男は霎時黙つて居ました

が、

「私は些も面白くありませんでした、詩人や文士なん

て、まあ俗物ばかりですな、餓鬼ですな。」

「私は詩人でも文士でもありませんから、敢て辯護も

しません、矢張り、幾ら詩人や文士と言つても、そ

りや人間らしい所はありますよ。」

「否、僕には些も人間らしく見えないのです、今日逢
つた奴、皆嫌ひです。」